

## 非適合有限要素法による抗力・揚力の誤差評価

九州大学 大学院数理学研究科 田端正久 (Masahisa Tabata)

### 1 はじめに

流れ場に置かれた物体に働く抗力・揚力を非適合有限要素法で求める。空間次元は  $d(= 2, 3)$  次元とし、水路を考える。  $x_1$  方向は水路の方向と一致し、  $x_2$  方向は鉛直方向とする。水路中に置かれた物体の境界を  $\Gamma_b$  とする。流体の存在する領域  $\Omega$  の境界  $\Gamma$  は  $\Gamma_b$  と  $\Gamma_c$  とから成り立っており、  $\Gamma_c$  は、流入境界  $\Gamma_i$ 、流出境界  $\Gamma_o$ 、側壁  $\Gamma_w$  とから成り立っているものとする。  $\Gamma$  で、流速境界条件

$$u = g$$

が課されている。  $\Gamma_b, \Gamma_w$  上では、粘着境界条件を仮定するので、ここでは、  $g = 0$  である。  $u, p$  を流速、圧力とする。  $u, p$  はナビエ・ストークス方程式

$$\begin{aligned} \rho(u \cdot \nabla)u - \mu \Delta u + \nabla p &= f, \\ \nabla \cdot u &= 0 \end{aligned}$$

を満たしている。ただし、  $f$  は外力、  $\mu, \rho$  はそれぞれ、粘性係数、密度である。関数空間

$$V(g) = \{v \in (H^1(\Omega))^d; v|_{\Gamma} = g\}, \quad V = V(0),$$

$$Q = \{q \in L^2(\Omega); \int_{\Omega} q \, dx = 0\}$$

を用意する。  $(u, p)$  は次の変分問題：  $(u, p) \in V(g) \times Q$  で

$$a(u, v) + a_1(u, u, v) + b(v, p) + b(u, q) = (f, v), \quad \forall (v, q) \in V \times Q \quad (1)$$

を求めよ、の解である。ここに、

$$a(u, v) = 2\mu \int_{\Omega} \sum_{i,j=1}^d D_{ij}(u) D_{ij}(v) \, dx, \quad D_{ij}(v) = \frac{1}{2} \left( \frac{\partial v_i}{\partial x_j} + \frac{\partial v_j}{\partial x_i} \right), \quad (2)$$

$$a_1(w, u, v) = \frac{\rho}{2} \int_{\Omega} \sum_{i,j=1}^d \left( w_i \frac{\partial u_j}{\partial x_i} v_j - w_i \frac{\partial v_j}{\partial x_i} u_j \right) \, dx,$$

$$b(v, q) = - \int_{\Omega} q \operatorname{div} v \, dx,$$

$$(f, v) = \int_{\Omega} f \cdot v \, dx$$

である。このとき、境界 $\Gamma_b$ に囲まれた物体に働く抗力 $D$ 、揚力 $L$ は

$$D = - \int_{\Gamma_b} \sum_{j=1}^d \sigma_{1j}(u, p) n_j \, d\gamma, \quad L = - \int_{\Gamma_b} \sum_{j=1}^d \sigma_{2j}(u, p) n_j \, d\gamma \quad (3)$$

で定義される。ここに、 $n$ は境界への外向き(流体からみて)単位法線ベクトルであり、 $\sigma$ は応力テンソル

$$\sigma_{ij}(u, p) = -p\delta_{ij} + 2\mu D_{ij}(u)$$

である。これらを、Gauss-Greenの定理を使って、領域積分表示に変換し[1]、誤差評価を行う。

Crouzeix-Raviart[2]の非適合一次要素を念頭に置き、次の問題を解決する。

1. (2)で定義される双一次形式 $a$ は、非適合一次要素空間(粘着境界条件を仮定)では強圧的ではない。流れ場の計算は、 $a$ を双一次形式

$$a^*(u, v) = \mu \int_{\Omega} \sum_{i=1}^d \text{grad} u_i \cdot \text{grad} v_i \, dx$$

に取り替えて行われる。そのとき、適切な $D, L$ の計算を行うこと。

2.  $a_1$ を風上型近似で置き換えたとき、 $D, L$ の誤差評価を行うこと。
3. 最近、開発された双対問題技法(Larson, M. G. [3])を使って、高精度の誤差評価を行うこと。

これらの結果の詳細は、論文John-Tabata-Tobiska [4]に発表予定である。

## 2 抗力・揚力の領域積分表示

抗力 $D$ 、揚力 $L$ は領域積分を使って次のように表示することができる。

補題1.  $w^D, w^L \in H^1(\Omega)^d$ を

$$w_i^D(x) = \begin{cases} \delta_{i1} & (x \in \Gamma_b) \\ 0 & (x \in \Gamma_c) \end{cases}, \quad w_i^L(x) = \begin{cases} \delta_{i2} & (x \in \Gamma_b) \\ 0 & (x \in \Gamma_c) \end{cases} \quad (4)$$

を満たす任意の関数とする。 $(u, p)$ を(1)の解とする。このとき、(3)式の $D, L$ は

$$D = -\{a(u, w^D) + a_1(u, u, w^D) + b(w^D, p) - (f, w^D)\}, \quad (5)$$

$$L = -\{a(u, w^L) + a_1(u, u, w^L) + b(w^L, p) - (f, w^L)\} \quad (6)$$

と表現できる。さらに、 $a$ を $a^*$ で、 $a_1$ を

$$a_1^*(w, u, v) = \rho((w \cdot \nabla)u, v)$$

で置き換えても、(5), (6)は成立する。

### 3 抗力・揚力の誤差評価

領域 $\Omega$ の正則な単体分割列を考える,  $h$ は各分割に現れる要素の最大直径とする.  $V_h(g)$ ,  $V_h, Q_h$ を, それぞれ,  $V(g), V, Q$ の非適合一次有限要素近似とする. 問題(1)の有限要素近似は,  $(u_h, p_h) \in V_h(g) \times Q_h$ で

$$a_h^*(u_h, v_h) + a_{1h}(u_h, u_h, v_h) + b_h(v_h, p_h) + b_h(u_h, q_h) = (f, v_h), \quad \forall (v_h, q_h) \in V_h \times Q_h \quad (7)$$

を求めることである. ここに,  $a_h^*, a_{1h}, b_h$ についている添字 $h$ は非適合要素を使うので, 積分を要素ごとで行いその和をとることを示している.

近似抗力 $D_h$ , 近似揚力 $L_h$ を

$$D_h = -\{a_h^*(u_h, w_h^D) + a_{1h}(u_h, u_h, w_h^D) + b_h(w_h^D, p_h) - (f, w_h^D)\}, \quad (8)$$

$$L_h = -\{a_h^*(u_h, w_h^L) + a_{1h}(u_h, u_h, w_h^L) + b_h(w_h^L, p_h) - (f, w_h^L)\} \quad (9)$$

で定義する. ここに,  $(u_h, p_h)$ は(7)の解であり,  $w_h^D, w_h^L$ は各成分が非適合一次要素空間に入り

$$w_{hi}^D(P) = \begin{cases} \delta_{i1} & (P \in \Gamma_b) \\ 0 & (P \in \Gamma_c) \end{cases}, \quad w_{hi}^L(P) = \begin{cases} \delta_{i2} & (P \in \Gamma_b) \\ 0 & (P \in \Gamma_c) \end{cases}$$

を満たす関数である.  $P$ は節点である. 次の定理が成立する.

定理1.  $h$ に依存しない正定数 $M$ が存在し,

$$|D_h - D|, |L_h - L| \leq Mh$$

が成立する.

定理1は移流項の近似を風上型近似 $a_{1h}^{upw}$ [5]に取り替えても成立する.

### 4 高精度評価

領域 $\Omega$ でStokes問題が正則であると仮定する. たとえば, 滑らかな境界を持つ領域は正則である[6]. このとき, 高精度の収束結果を得ることができる.

定理2. ある正定数 $\mu_0$

$$\mu_0 = \mu_0(\|g\|_{H^{1/2}(\Gamma)^d}, \|f\|_{L^2(\Omega)^d})$$

が存在し,  $\mu \geq \mu_0$ なる $\mu$ にたいして,  $h$ に依存しない正定数 $M$ が存在し,

$$|D_h - D|, |L_h - L| \leq Mh^2$$

が成立する.

証明は、領域積分で表現された抗力、揚力の式(5),(6)に現れる関数 $w^D, w^L$ の選択に、任意性があることを利用する。その関数を、 $(\phi, r)$ を未知関数とする双対問題[3]

$$\begin{aligned} -\mu\Delta\phi_i - \rho(u \cdot \nabla)\phi_i + \frac{\rho}{2} \left( \theta^{(i)} \cdot \phi - u_h \cdot \frac{\partial\phi}{\partial x_i} \right) + \frac{\partial r}{\partial x_i} &= 0 \quad (i = 1, \dots, d), \\ \nabla \cdot \phi &= 0 \end{aligned}$$

の解の第一成分 $\phi$ にとる。ただし、 $\phi$ の境界条件は(4)であり、

$$\theta^{(i)} = \sum_K \frac{\partial u_h}{\partial x_i}(K) \chi_K.$$

である。 $\chi_K$ は要素 $K$ の特性関数である。双対問題は有限要素解 $u_h$ に依存するが、 $\phi$ の $H^2(\Omega)^d$ ノルムは $h$ に依存しないことを示すことができる。

## 参考文献

- [1] M. Tabata and K. Itakura. Precise computation of drag coefficients of a sphere. *Intern. J. Comput. Fluid Dynamics*, Vol. to appear, , 1997.
- [2] M. Crouzeix and P.A. Raviart. Conforming and nonconforming finite element methods for solving the stationary Stokes equations. *RAIRO Numer. Anal.*, Vol. 3, pp. 33–76, 1973.
- [3] M.G. Larson. *Analysis of Adaptive Finite Element Methods*. PhD thesis, Department of Mathematics, Chalmers University of Technology, Göteborg, 1996.
- [4] V. John, M. Tabata, and L. Tobiska. Error estimates for drag and lift coefficients by nonconforming finite element method, to appear.
- [5] F. Schieweck and L. Tobiska. An optimal order error estimate for an upwind discretization of the Navier–Stokes equations. *Numer. Methods Partial Different. Equations*, Vol. 12, pp. 407–421, 1996.
- [6] V. Girault and P.-A. Raviart. *Finite Element Methods for Navier–Stokes Equations. Theory and Algorithms*, Vol. 5 of *Springer Series in Computational Mathematics*. Springer–Verlag, Berlin Heidelberg New York, 1996.